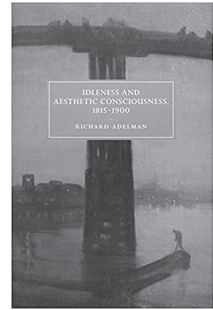


書 評

Richard Adelman,
Idleness and Aesthetic Consciousness,
 1815–1900

(Cambridge: Cambridge University Press, 2018)

石川 大智



多くを生み出し、失いもした近代において、徒然なるままに生きることは難しい。19世紀において怠惰と無為のうちにあるとはどういうことか。それはいかなる文化的・美的な価値を持ち、影響を受け、与えたのか。ロマン主義からヴィクトリア朝期を彩る作家や批評家たちは、自らと他者との間にうごめく‘idleness’なる魔物と向き合い、目を背けつつ、その容貌と変貌を多様な形式と媒体のうちに表象してきた。「怠惰」というキーワードのもとに、特定のテキストを自由に語ることは容易い。だが、一定の時間軸に沿いながら、この一見つかみ所のない概念が当時の美意識や美的感性といかに連動し発展を遂げたのかを解きほぐし、これを一つの精神史として繋ぎ合わせる作業には途方もない苦労がつきまとう。狭い時代区分やジャンル意識をこえて、かつ図式的な議論に陥らないための確かなバランス感覚に裏付けられた精緻なテキスト解析(精読)能力が一度に要求されるためである。現在イギリスのSussex大学英文科で上級講師(Senior Lecturer)を務める著者Richard Adelman (1982-)がこの役に相応しい脱領域的視点をもっていることは、本書を紐解けば明らかである。Gillian Beerを編集主幹に冠したケンブリッジ大学出版局の「19世紀文学・文化研究」シリーズから刊行された本書は、2011年に同出版局から上梓された同著者の*Idleness, Contemplation and the Aesthetic, 1750–1830*の続編にあたり、これまで体系的に論じられることのなかった上記の諸問題に真正面から取り組んだ労作として、ヴィクトリア朝研究を「長い19世紀」研究の流れの中で相対化し繋ぎとめるための新たな視座を与えてくれることだろう。

Adelmanは「序論」で、自らの精神史の行き先と妥当性を示すべく、

George Eliotの *Middlemarch* (1871-72) に本書の鍵となるテーマが象徴的に見られると指摘する。スケッチブックを手に写生をしている青年 Will Ladislaw が初登場時に周囲から怠け者扱いされる場面、さらに新婚の Dorothea が夫 Edward Casaubon と訪れたローマにてドイツ人芸術家 Adolf Naumann と一緒に Ladislaw と再会するシーンなどがそれだ。Adelman によれば、ここには長い19世紀を支配する2つの異なる価値観がぶつかり合っている。いつ完成するとも知れぬ大著に勤勉に取り組む牧師で学者の Casaubon が、19世紀イギリスにおける勤勉さや労働・宗教・行動倫理との関係を体現する存在ならば、彼が冷やかな視線を投げかける芸術に傾倒し定職につこうとしない Ladislaw のような人物造型からは、芸術や美学と 'idleness' との密接な関係が、詩的想像力としての怠惰への讃歌となって読み取れるという訳だ。

本書で Adelman の紡ぐ精神史は、とはいえ単なる二項対立には回収されない奥行きを秘めてもいる。対立軸は、導入されるや否やしばしば、さらなるテキスト分析によって巧妙にずらされていくためだ。現に Casaubon の勤勉さと Ladislaw の芸術的無為や怠惰といった図式は、19世紀にドイツからイギリスへ輸入される高等批評 (Higher Criticism) という別の評価軸の登場により小説内で逆転する。この新たな世界では、職業倫理の権化であるかに見えた Casaubon の大仕事は単に時代錯誤のアマチュアの自己満足へと墮し、芸術にうつつを抜かしていたように思えた Ladislaw が今や高度に専門化したドイツの最新の人文科学により近く、勤勉な存在へとすり替わっていくのである。自由や進歩への意志は、後に Dorothea の二度目の夫となり議員となる Ladislaw の内部で広く社会改革や労働倫理へと結びつけられ昇華されることで、当初の対立は融合へと変化する。Adelman が本書で強調するのは、2つの価値観の相克をつねに内包しながら現れてくる 'idleness' という概念が、19世紀の美意識や美的感性の形成に及ぼした役割の大きさである。これは言い換えれば、ヴィクトリア朝社会がロマン主義の知的遺産をいかに再解釈していったのかという過程を、美的カテゴリーとしての 'idleness' 受容に生じた質的な変化を手がかりに解明する知的作業でもある。

本書の核となる議論を簡潔にまとめれば次のようになる。長い19世紀

において、ロマン派詩人により称揚され絶頂期を迎える‘idleness’の地位は、ヴィクトリア朝時代へと至る文化状況、特に政治経済学 (political economy) や「労働の福音」(the ‘gospel of work’) といった行動・労働倫理に複雑に絡め取られながらも、それらを特徴付ける。‘idleness’の論理は、一見相反する労働倫理の中でさえ根強く働いていることが明らかとなるのだ。第1章ではまず、18世紀末に‘idleness’による詩的言説を形作った William Cowper と S. T. Coleridge らの先行詩人に対し、ロマン派第2世代にあたる P. B. Shelley と John Keats がいかに応答し、自らの立ち位置を確保しようとしたかが間テクスト性の観点から細かく分析される。Coleridge の ‘The Eolian Harp’ と ‘Frost at Midnight’ が Shelley の ‘Mont Blanc’ に与えた影響に関し、‘the idle mind’ と ‘the intense, seemingly externally driven mental activity that occurs in aesthetic contemplation’ (25) の働きと意義に着目して分析する際など、当時の込み入った詩の出版事情やそれに伴うロマン派の世代間交流の実態をめぐる書物史的な考察もあり、単なる一方向的な影響分析から抜け出している。Coleridge の描く受動性に対し、Shelley には (特に *A Defence of Poetry* の記述によれば) 精神と外界のバランスをより保とうとするなどの微妙な差異が見受けられる。他方、受動性や詩的観想がもつ独我論的な傾向や危険性は、例えば Keats の書簡においてはより他者に開かれた社会性を伴って現れてくる。このように、決して大きなナラティブにはとどまらないのだという重層性が随所に感じられることは、本書を通じて Adelman の精神史の解説をより難しくもする。

第2章から3章では、美的観想を伴う‘idleness’の内面性を保持しつつも時に突如露わになる社会性への意志が、19世紀の政治経済や「労働の福音」に及ぼした影響が論じられる。怠惰で無為であることがオルタナティブとして社会的に力を持ちうるならば、人間を何よりも労働力や働く動物と見なしてきたような政治・経済思想はどのような変化を迫られるのだろうか。Adelman は、18世紀後半から19世紀にかけての政治経済の変化を、‘idleness’に対する反応の違いの中に読み取る。先行する経済論者とは異なり、David Ricardo や Thomas Malthus、そして John Stuart Mill は、程度の差こそあれ、無為や静謐 (human repose) が人間心理に与える肯定的な役割の意義を認めていたというのである。William Wordsworth の詩

との出会いを通して精神の危機を乗り越えたと *Autobiography* (1873) で述懐する Mill は、*Principles of Political Economy* (1848) において好意的に ‘idle contemplation’ を記述することで、政治経済学とロマン派という異なる伝統の融合に成功し、その影響力は当時の経済思想のみならず 19 世紀全般に及んだ。

3 章以降で詳述されるように、ロマン派や Mill に代表される肯定的な ‘idleness’ 表象は、1830 年代から 1860 年頃にかけて盛んに唱えられた「労働の福音」という強力な社会規範・倫理に取り込まれ、軋轢を生みつつも新たな場を見出していく。Adelman はここで、*Middlemarch* の分析を想起させつつ 19 世紀イギリスとドイツとの知的つながりを踏まえながら、Thomas Carlyle や Karl Marx における理想の労働観に、‘idleness’ と結びついた美的観想や受動性が大きな意味を担っていたと論じる。ここで Carlyle にとって労働は詩であり、労働者は詩人でもあったように、Marx にとって真に自由で自発的な労働は美的観想と不可分なのだ。

第 3 章後半から最終部 (5 章と結論後のエピローグ) にかけては、‘idleness’ の衰退と没落に力点が置かれる。ヴィクトリア朝中期・後期の ‘idleness’ は、自らの対立候補を内に吸収することで矛盾も抱えながら、次第に文化資本としての階級構造の中へと組み込まれ孤立していく。ロマン派的 ‘idleness’ の称揚は、それを引き継いだヴィクトリア時代の瞑想詩 (contemplative poetry) や、John Ruskin や William Morris へと至るユートピア的理想へと舞台を移すが、新たに強調されるのは「現在」とは切り離された過去の残光であり、その非現実性や再現不可能性の方である。世紀半ばに ‘idleness’ が肯定から否定への価値観の転換を迫られるという構図は、4 章で検討されるように、世紀後半にこの概念が Matthew Arnold や Ruskin らの文化批評や Walter Pater の唯美主義とも結びつき、‘idle contemplation’ と ‘aesthetic consciousness’ の体現者でもある少数の知的エリートの専有物となっていく過程でより先鋭化する。「労働の福音」の影響は、ここではむしろ主に大学のドンからなる知的エリート層が自らの職業を極度に専門化し、特権 (個人) 化するという方向に作用したのだと述べられる。生じるのは、‘idleness’ の疎外である。第 5 章とエピローグにおいては、ロマン派を経由して世紀末へと至り大衆の人気を博した「吸血鬼もの」というゴシック

的伝統の中にもこそ、ひいては後のフロイトの *Civilization and Its Discontents* (1930)における心理・政治哲学的考察にも同様に、美的カテゴリーとしての‘idleness’なる魔物に向けられたヴィクトリア朝後期の拒絶や強い排除意識が色濃く投影されていると補足され、本書は締め括られる。

ある概念やイメージに生じた変化を精神史として追跡する場合、鍵となる用語の使用法や定義が問題となってくる。本書でAdelmanは、「怠惰」「無為」「観想」「静謐」「受動性」といった複数のイメージを包摂し美学的に関連づける用語として、タイトルにある‘idleness’や‘aesthetic consciousness’に加え、‘idle aesthetic contemplation’や‘idle contemplation’、‘idle passivity’、‘contemplative passivity’、‘aesthetic passivity’、‘contemplative leisure’、‘repose’、‘aesthetic transcendence’、‘transcendent imagination’のような表現を好む。ある程度置き換えが可能とはいえ、これらは必ずしも一貫して用いられているとは言えず、互いの関係性が曖昧なままの箇所も少なくない。用語の妥当性について一度、(Raymond Williamsの*Keywords*に倣ってという訳ではないが)序盤で何らかの言及や批評的な目配せがあってもいいだろう。定義なき用語の濫用は、かえって論じる対象や名称がもつ歴史性や他の鍵概念との差異をぼかすこともある。

もっとも、著者の関心が‘idleness’という概念が孕む意味の曖昧さや揺れといった点にあることを鑑みれば、これは必ずしも本書の価値を損ねるものではないかも知れない。些細な点に目がいくほどに、Adelmanの学問的土台は堅固なのだ。Marxの娘婿でもあるPaul Lafargue (1842-1911)の *Le droit à la paresse [The Right to Be Lazy]* (1880; 英訳1883)やBertrand Russell (1872-1970)の‘In Praise of Idleness’ (1932)、さらには『徒然草』(G. B. Sansom 訳、1911; Donald Keene 訳、1967)など、我が国でも馴染みのある著作がこの精神史のどこに位置付けられるかを考えるのも一興である。

— 慶應義塾大学・東京大学非常勤講師